

## 巻頭言

## 「サイロエフェクトと近畿支部活動

## -Flipping the lens-」

副支部長 南部秀和



総会学術大会開催中に発生した平成28年熊本地震でお亡くなりになられた方、被災されておられる方、甚大な被害に見舞われた方々にご冥福と1日も早い復興を近畿よりお祈り申し上げます。さらに、がん患者、透析患者、在宅医療や緩和医療などを受けておられる皆さんがさまよわないよう<sup>1</sup>、現場におられる医療・福祉従事者の方々におかれましては無理せず、日頃培った現場力<sup>2</sup>を發揮していただきますようお願い致します。

40歳になる前に読んだ横山秀夫の小説「半落ち」で気になっていた『人生50年』というフレーズ、気がつけばあっという間に月日は過ぎていました。一昨年のゴールデンウィークに50歳になったことを機に、小学校の同窓会があり地元で旧友に再会する機会に恵まれました。大多数は中学にもちあがりであったので35年ぶりの再会ということになります。宴席で時が経つにつれ昔の記憶と目の前の同級生が紐付けされていきます。そんななか、

友「南部君は何をしてるん」

ナ「大学で放射線治療をしてるんやけど」

友「先生なん」

ナ「診療放射線技師って知ってる」

友「レントゲンの」

ナ「放射線でがんの治療をしてるんやけど」

友「やっぱり先生なん」

ナ「医学物理士って知らんよな」

友「何、物理士って」

ナ「放射線治療の計画とか精度管理をしてるんやけど」

友「...」

ナ「〇〇君は何してるの」

友「××××ホテルの開発。日本担当してる」

ナ「あの××××ホテルの、げっ、なんと」

この時、自分の仕事の説明が特別下手であったと言うことはないし旧友が、特別しゃべりが上手であった訳でもありません。「チーム医療」をよく耳にするようになりましたが、医療従事者は国家資格や診療科、種々の団体認定によってあまりに細かく細分化されすぎて、われわれ自身もはっきりしない部分が多いのではないのでしょうか。患者には病院の仕組みがどうみられているでしょう。何かの症状で困っている方が病院を訪れたとして、自分はどの科の医師に診てもらおうのがよいか分からないケースは多いと思います。皮肉にも、症状から診療科を探し当てる医療従事者がさらに必要になります。

同級生と別れを告げた10代の頃、ソニーがWALKMAN®を発表し世界中で爆発的なセールスを記録します。Sonyロゴの入ったLPレコードもよく目にしました。ハードウェアからソフトウェアを取り扱う世界的な企業に成長しますが、皆さんご存じの通りアップルのiPod®やiTune®にその座を奪われます。ビジョナリーカンパニー<sup>3</sup>であるはずのソニーは縦割りの体制（サイロ：牧草などの飼料用貯蔵庫の意）が、その企業の魅力を発揮できないように作用してしまいました。各サイロの内部の人間は気がつきません。統括者もKaizen<sup>4</sup>することができませんでした。

医療における放射線技術はどうでしょうか。われわれの日本放射線技術学会はどうでしょうか？高い専門性、技能や研究を推し進めようとする会員は学会の財産です。各種部会や支部はさまざまな事業を通じてサイロを築いています。高度化する医療技術にはサイロは必要不可欠です。

私は10年間、近畿支部の学術委員として各分野で著名な委員の方々と企画運営に携わりました。当初、異なる分野の委員の方々と議論はあまり気がすすみませんでした。現在は「人種のサラダボール」と呼ぶそうですが、私は当初、『「人種のルツボ」やなー』とよく思っていました。それぞれの野菜は決して個性をなくすことなく彩りに魅了され、ドレッシングによって新たな味に変化を遂げます。

私は10年間、本学会の学術大会の放射線治療分野プログラム委員として活動してきました。演題の審査と共に、既存の部会枠で演題群を編成してきましたが、ここ数年お気付きの方もおられることと思いますが、疾患や臓器、画像工学や放射線被ばくなどを切り口にするコラボレーションの演題群を企画しています。昨年の金沢での秋季学術大会での教育委員会企画（「最先端の放射線診断と放射線治療技術の融合－実践；inter-professional education（IPE）－」）は記憶に新しいところです。時間いっぱい、司会者は学会名誉顧問の土井邦雄先生にマイクを預けます。日本の学会は技術の融合を議論してこなさすぎた、欧米に大きく遅れをとっていることを指摘され、この企画を賞賛されました。

高精度化や細分化は現在の社会に不可欠ですが、物事を俯瞰的に捉え、相互に作用することが重要であるところの10年で学会活動を通じ学ばせていただきました。書籍「サイロエフェクト 高度専門化社会の罠」<sup>5</sup>ではクリーブランド・クリニックの実例が描かれています。失読症の心臓外科医、後のCEOトビー・コスグローブの言葉を引用します。

『想像力は異なるところで生まれたアイデアを混ぜ合わせたときに生まれることが多い。「私のアイデアの多くは心臓外科以外の分野あるいは事象との比較によって生まれ、さらに異分野の専門家とも協業を必要とするものだった。イノベーションはある分野が別の分野と接する縁の部分で起きる」と語る。つまりサイロが崩れた場所で起きる、ということだ。』

「壊しながら造る」分子生物学者 福岡伸一の「動的平衡」<sup>6</sup>にも通ずる概念。「サイロに抗い理念を据える」、科学・医療・営利活動に通ずる。われわれの近畿支部に今、何が足りて何が足りないのであろうか。

<sup>1</sup> [http://ganjoho.jp/data/public/support/brochure/saigai\\_booklet.pdf](http://ganjoho.jp/data/public/support/brochure/saigai_booklet.pdf)

<sup>2</sup> [http://ganjoho.jp/data/professional/med\\_info/disaster\\_experience/genbaryoku\\_booklet.pdf](http://ganjoho.jp/data/professional/med_info/disaster_experience/genbaryoku_booklet.pdf)

<sup>3</sup> ジェームズ・C・コリンズ/ジェリー・I・ポラス著 山岡洋一訳：ビジョナリーカンパニー時代を超える生存の原則、日経BP出版センター、1995、東京

<sup>4</sup> 継続的に改善する意としての英語化した日本語

<sup>5</sup> ジリアン・テット著 土方奈美訳：サイロエフェクト 高度専門化社会の罠、文藝春秋、2016、東京（引用文下線は著者による）

<sup>6</sup> 福岡伸一：生物と無生物のあいだ、講談社現代新書、2007、東京